

# 健診項目 説明書



◎社会福祉法人 関大阪府済生会吹田医療福祉センター

健都健康管理センター

---

〒564-0018 吹田市岸部新町5番45号 VIERRA(ビエラ) 岸辺健都2階

電話 06-6192-7275(代表) 06-6192-7276(予約専用)

FAX 06-6338-0455 web <https://www.kento.saiseikai.or.jp/>

# ～健康診断成績表の見方～

☆健康診断成績表(1)の総合指導コメント欄をご覧ください。

今回の健診結果の総評が記されています。

☆健康診断成績表(1)の下欄をご覧ください。

健診結果による今後の日常生活上の健康へのアドバイスが記されています。

☆健康診断成績表(2)以降には、ご受診いただいた検査項目ならびに診断名が記載されています。

☆結果が基準値から外れた項目には、「↑」・「↓」が記載されています。

定性検査の異常値の項目には、「\*」が記載されています。

☆健康診断成績表の基準値は人間ドック学会の基準に基づいています。多少の基準値外はすぐに病気というわけではありません。

☆判定が「D1」・「D2」の項目に関しては精密検査が必要です。

☆主な検査項目の意味については、本書の次項以降の説明を参照してください。



身体測定	標準体重	標準体重とは、「身長（m）×身長（m）×22」で計算されます。
	腹囲	内臓脂肪の蓄積を推定するために、ヘそのレベルで計測します。メタボリック症候群や特定健診の判定に利用します。
	BMI (Body Mass Index)	身長に見合った体重かどうか判定する数値です。基準値は22です。
	体脂肪率	体重の中で脂肪の占める割合を示します。
血圧	血圧を上腕で測定します。2回測定し、平均値で判定します。収縮期血圧は心臓が血液を送り出すときに血管壁にかかる圧力で、拡張期血圧は静脈から心臓に血液を入れるときに血管壁にかかる圧力のことです。	
眼科	視力	裸眼もしくは眼鏡・コンタクトレンズをつけて測定します。
	眼圧	眼球は、房水という液体によって圧力が保たれています。その眼球の内圧を検査し、視野が狭くなつて失明のおそれもある緑内障がないかなどを調べます。高眼圧の場合、緑内障などが疑われます。
	眼底	瞳孔から眼球の奥を覗いて網膜を観察する検査です。網膜の病気のほか、高血圧・動脈硬化・糖尿病などの情報を得ることができます。
聴力	1000Hz 4000Hz	1000Hz（低い音）と4000Hz（高い音）が聞こえているかを調べます。
肺機能	肺活量	最大限息を吸い込んだ後に肺から吐き出せる空気量のことです。
	%肺活量	年齢・性別・身長から算出された予測肺活量に対して、実測の肺活量が何%であるか調べます。低値の場合、間質性肺炎や肺線維症などの拘束性肺疾患が疑われます。
	1秒量	最大に息を吸い込んでから一気に吐き出すとき、最初の1秒間の呼気量です。
	1秒率	1秒量が肺活量の何%にあたるか示したもので。低値の場合、肺気腫・慢性気管支炎・喘息などの閉塞性肺疾患が疑われます。
	%1秒量	慢性閉塞性肺疾患（COPD）の早期診断のために、性別、年齢により予測1秒量をもとめ、それに対する自分の%値です。
血液一般	白血球数 (WBC)	生体を細菌などの病原体から守る免疫に役立つ成分です。病原体が生体に入ると増加します。炎症性疾患などで高値になります。
	赤血球数 (RBC)	身体に酸素を運ぶ血球成分です。少ない場合は貧血や出血を、多い場合は多血傾向を示します。
	ヘモグロビン (Hb)	赤血球の中に含まれる酸素を運ぶ成分です。鉄分が不足したり、赤血球の中の色素を作る能力が減少した場合に低下します。低値は貧血症を示します。
	ヘマトクリット (Ht)	血液は、固形成分の血球と液体成分の血漿に大別でき、ヘマトクリット値は、血液中の血球の割合を示します。貧血があると低下し、多血症のときは増加します。
	MCV	平均赤血球容積で、赤血球一個あたりの容積（大きさ）を示します。
	MCH	平均赤血球ヘモグロビン量で、赤血球一個あたりに含まれるヘモグロビン量を示します。
	MCHC	平均赤血球ヘモグロビン濃度で、赤血球の一定容積に対するヘモグロビン量の比を示します。
	血小板数 (PLT)	血小板は出血がおきると血管から出血した部位に付着し止血の役目を果たします。血小板が少ない場合は、体の中で血小板を作る機能が落ちているか脾臓で壊されている可能性があります。慢性肝障害が進行すると、低下することがあります。

鉄代謝	血清鉄	血液中の鉄分が足りているかどうかを調べる検査です。鉄欠乏性貧血などの診断に役に立ちます。
	フェリチン	貯蔵鉄量を示します。低下では鉄欠乏性貧血等、上昇が認められた時には鉄が過剰に体内に蓄積された状態を示します。
炎症	CRP	体内に炎症、細菌感染などがあると、血液中に現れる蛋白質（C反応性蛋白）の量を測定するものです。急性の炎症があると高くなります。
血清反応	HBs抗原	肝炎を引き起こすウイルスのひとつであるB型肝炎ウイルスに感染しているかどうかを調べます。
	HBs抗体	過去にB型肝炎に罹った事があるかB型肝炎ワクチンを接種された場合に陽性になります。
	HCV抗体	現在C型肝炎ウイルスに感染している、あるいは過去に感染したことを示します。
	TP判定・RPR判定	梅毒に感染しているかを調べます。ただし、膠原病など梅毒以外でも陽性になることがあります。
	RF（リウマチ因子）	血液中に含まれているリウマチ因子の有無を見る検査です。関節リウマチの時に陽性になることがあります。しかし、リウマチ以外でも慢性肝疾患・感染症・他の膠原病などの場合に陽性になることがあります。

脂質	総コレステロール (T-cho)	コレステロールは血液中に含まれる脂肪分のひとつで、細胞やホルモンを作るために必要な物質です。これが高いと動脈硬化が進行し、心筋梗塞や狭心症、脳梗塞などが起こりやすくなります。
	中性脂肪 (TG)	高カロリー食やアルコールの過飲などで過剰に摂られたエネルギーは中性脂肪として貯蔵され、さらに増加すると皮下脂肪や肝臓に蓄えられます。これが高くなると、内臓脂肪を増やしたり脂肪肝の原因となります。
	HDLコレステロール	善玉コレステロールと呼ばれ、動脈壁に付着したコレステロールを再び血液中に洗い出す働きがあります。これが高いと動脈硬化に予防的に働き、低いと動脈壁へのコレステロール沈着は増え動脈硬化を促進させます。
	LDLコレステロール	悪玉コレステロールと呼ばれ、コレステロールを末梢細胞に運搬する働きがあります。高値の場合、動脈硬化が進行し心筋梗塞や狭心症などになります。
	non-HDLコレステロール	総コレステロールからHDLコレステロールを引いたものです。総悪玉とも言えるもので、血液中にはLDLコレステロールとは別の悪玉が存在し、その別の悪玉を含めたすべての悪玉の量を表します。
糖代謝	HbA1c (NGSP)	1-2か月前の平均的血糖値を反映します。受診直前の食事や飲酒などによって変動することはありません。
	空腹時血糖	血液中のブドウ糖は身体の大切なエネルギー源です。インスリンの働きで、食後に血糖が上昇しても一定に保たれています。糖尿病でインスリンの作用が不足すると血糖値は上昇します。

肝機能	AST (GOT)	心臓・肝臓・筋肉・腎臓などのさまざまな臓器に存在する酵素です。これらの臓器が障害を受けると、この酵素が血液中に放出され、濃度が高くなります。
	ALT (GPT)	ASTと同じように身体のさまざまな臓器に存在しますが、肝細胞の変性に敏感に反応します。
	$\gamma$ -GTP	蛋白質を分解する酵素のひとつです。肝臓や胆道に病気があると高値を示しますが、アルコールの影響で高値になりやすく、アルコール摂取による肝機能障害の診断の指標になります。
	ALP	身体のほとんどの臓器に含まれている酵素ですが、主に肝臓、胆管、骨、胎盤などに多く分布し、これらの臓器の疾患で高値を示します。
	LDH	各種臓器に広く分布し、肝臓、心臓、腎臓などの臓器のほか、筋肉や血液にも多く存在します。これらの臓器の疾患で高値を示します。
	総ビリルビン	赤血球には寿命があり毎日少しづつ壊れていますが、その分解の際、ヘモグロビンが分解されて生じるものがビリルビンです。肝胆道疾患、体质性黄疸、貧血などの場合に高値を示します。
	総蛋白 (TP)	血液中にはアルブミンやグロブリンなどの蛋白があり、身体の働きに重要な役割を果たします。肝機能や腎機能の障害により、身体の代謝に異常があると、蛋白の合成や分解などが変動し、総蛋白も増減します。
	アルブミン (ALB)	血液中に一番たくさんある蛋白で、肝臓で合成されます。脱水状態で高値を示し、肝障害や腎障害の時に低値を示します。
	CHE (コリンエステラーゼ)	肝臓障害や栄養障害などで低下し、ネフローゼ症候群や脂肪肝などでは高くなります。
脾臓	A/G比	血清中のアルブミンとグロブリンの比を調べることで、血清蛋白の異常を知ることができます。ネフローゼ症候群や肝疾患、慢性感染症などで低くなります。
	アミラーゼ	脾臓や唾液腺に含まれる消化酵素です。主にこれらの臓器の疾患で、血中や尿中にたくさん排泄され、値が高くなります。

腎機能	尿素窒素 (BUN)	尿素窒素は蛋白が身体の中で分解されたときにできる老廃物で、これは腎臓から尿中に排出されます。絶食や脱水時に一時的に高値になることがあります。
	クレアチニン	老廃物の1種です。数値が高いと体外への排出量が減っていることになり、腎臓の機能が低下していることを示します。
	eGFR	慢性腎不全 (CKD) の早期診断のために、換算式でクレアチニン・年齢・性別により推算糸球体濾過量を求めた数値です。
電解質	ナトリウム (Na)	脱水症・食塩過剰摂取時・尿崩症・原発性アルドステロン症などの場合に高値を示し、嘔吐・下痢・ネフローゼなどの場合に低値を示します。
	カリウム (K)	急性腎不全・慢性腎不全の末期・高度のアシドーシスなどの場合に高値を示し、飢餓・嘔吐・原発性アルドステロン症・利尿剤投与時などの場合に低値を示します。
	クロール (Cl)	脱水症・低蛋白血症・腎不全などの場合に高値を示し、嘔吐・利尿剤投与時・急性腎不全などの場合に低値を示します。
	カルシウム (Ca)	原発性副甲状腺機能亢進症・悪性腫瘍などの場合に高値を示し、ビタミンD欠乏症・副甲状腺機能低下症・骨軟化症・慢性腎不全などの場合に低値を示します。
痛風	尿酸 (UA)	身体の細胞の核にあるプリン体が壊れてできるものです。尿酸の合成や組織の破壊、腎臓での尿酸排泄の低下などで血中の尿酸濃度は高くなり、関節に沈着し痛風を、腎臓に沈着し腎障害を、慢性的に尿酸値が高いと動脈硬化を引き起こす危険性があります。
便検査	便潜血反応	消化管内での微量の出血の有無をみる検査です。大腸癌・大腸ポリープなどで陽性に出ることが多いので、陽性の場合は精密検査（大腸内視鏡検査）を受ける必要があります。
	便中卵	体内部に生息している寄生虫の存在を、糞便中の虫卵を見ることで判定する検査です。陽性を示す病態は、消化管の寄生虫感染症です。

尿 一 般	尿蛋白	慢性腎臓病、腎炎、尿路感染症など腎臓や尿路等の病気発見の手がかりになります。高熱が出た時の熱性蛋白尿や起立性蛋白尿、一過性の過労等で陽性となることがあります。
	潜血	尿中の血液の反応を見る検査です。
	糖	糖尿病のように血糖が異常に高くなると、尿に出現します。ある種の糖尿病の薬剤で陽性になることがあります。
	ケトン体	重症糖尿病のはか、糖質供給不十分(飢餓)の時・過脂肪食・嘔吐・下痢・脱水などのときに陽性になることがあります。
	白血球	腎尿路系の炎症の場合（腎結核・腎孟炎・膀胱炎・尿道炎・前立腺炎など）に陽性となります。
	pH	運動後などで酸性度が高くなります。また、尿路感染症では、アルカリ性傾向になります。
	比重	腎臓での尿の濃縮力を調べています。高値の場合、糖尿病・脱水症などが、低値の場合、自然・尿崩症などが疑われます。
	ウロビリノーゲン	肝障害時に高値になることがあります、運動後・疲労時・飲酒・便秘などでも高値になることがあります。
尿 沈 渣	赤血球	腎尿路系(結石・腎炎・膀胱炎・悪性腫瘍など)の出血、月経血の混入・激しい運動後(マラソンなど)・寒冷暴露などで陽性となることがあります。
	白血球	腎尿路系の炎症の場合（腎結核・腎孟炎・膀胱炎・尿道炎・前立腺炎など）に陽性となります。
	上皮細胞	長期間、多数認められる場合は、腎臓病の可能性があります。
	円柱	長期間、多数認められる場合は、腎炎や尿路感染症が疑われます。
	細菌	腎尿路系の炎症（腎孟炎・膀胱炎）のときに認められます。

腫瘍マーカー	CEA	消化器系の癌、一部の肺癌などで高値を示します。喫煙者・アルコール常飲者・高齢者などでも高値を示すことがあります。
	AFP	肝臓癌の場合などで高値を示します。妊娠・慢性肝炎・肝硬変などでも高値を示すことがあります。
	CA19-9	膵臓癌、胆のう・胆管癌などで高値を示します。膵炎・胆管炎などでも高値を示すことがあります。
	SCC	扁平上皮（細胞の種類）がん、で陽性率が高く、肺がん、子宮がん、皮膚がん、食道がん、膀胱がんなどで高値を示すことがあります。がん以外の疾患では、気管支炎、結核、アトピー性皮膚炎、腎不全などでも高値を示すこともあります。
	CA125	卵巣癌・子宮内膜症などで高値を示します。妊娠中や月経中にも上昇することがあります。
	PSA	前立腺癌の場合に高値を示します。前立腺肥大症・前立腺炎でも高値を示す場合があります。

胸部 レントゲン 検査	胸部全体を撮影し、肺や縦隔に異常な影があるかどうか、心臓の形に異常があるかどうかを調べます。
喀痰	痰（気管や気管支粘膜からの分泌物）の中にどのような病的成分が含まれているか調べるものです。特に、肺がんは痰の中にがん細胞が排出されることも多く、診断のひとつとして有効です。
心電図 検査	心臓の筋肉が収縮したり拡張したりするときに流れるわずかな電気を記録するものです。不整脈をはじめ狭心症・心筋梗塞などの心筋の異常や、心臓弁膜症などを診断することができます。
胃 レントゲン	造影剤（バリウム）と発泡剤を飲み、横になり体を回転し、胃の壁にバリウムを付着させます。粘膜の微細な凹凸・ひだ・ひきつれなどを描出し、癌・ポリープ・潰瘍などの胃病変の診断をします。検査終了後、バリウムを速やかに排出していただくために下剤の服用をお願いしています。 要精査の場合は、確定診断をつけるため胃内視鏡検査による精密検査が必要です。
胃 カメラ	直径が数ミリのスコープの先端にレンズがついた検査器具を鼻や口から挿入して、食道・胃・十二指腸の粘膜の状態を直接観察します。逆流性食道炎、胃炎、潰瘍、ポリープや早期の癌などの病変を見つけることが出来ます。 要精査の場合は、確定診断をつけるため再度検査し、組織を採取する必要がある必要があります。
腹部 超音波	周波数の高い振動波を、腹部の各臓器（肝臓・胆嚢・脾臓・脾臓・腎臓など）にあてて、形態や病変の有無（腫瘍・結石・のう胞・ポリープなど）を調べる検査です。超音波の通りをよくするためゼリーを体表面に塗り、探触子（プローブ）を用いておなかをなでるように検査します。
眼底 検査	周囲を暗くして瞳孔を散大させ、無散瞳眼底カメラで眼球の奥にある血管・網膜・視神経を撮影する検査です。
婦人 科 検査	子宮頸部細胞診・経腔エコーを実施しています。
乳 が ん 検 査	マンモグラフィ 乳腺の病変をX線装置で調べます。
	超音波 乳腺の病変を超音波装置で調べます。
頭部 MRI	磁石と電磁波装置を用いて脳の断面を描出します。 脳梗塞・脳腫瘍などを発見します。

## 所見の詳しい説明

胸部 レントゲン 検査	結節影	直径3 cm以下の円形の影をいいます。原発性肺癌や、他の臓器からの転移、結核、肺真菌症、非結核性抗酸菌症、過去の肺炎、良性腫瘍（過誤腫など）などが考えられます。
	浸潤影	境目がわかりにくい影をいいます。肺炎、肺結核など肺感染症などが考えられます。
	腫瘍影	直径3 cmを超える円形の影をいいます。肺膿瘍、肺腫瘍などが考えられます。
	索状影	太さが2~3mmのやや太い形状の影をいいます。過去や現在の肺感染症などが考えられます。
	線状影	太さが1~2mmの細い線状の影をいいます。胸膜の肥厚や、心不全でのリンパ管の拡張などが考えられます。
	網状影	直径数mm前後の網の目状に見える影が広い範囲に広がって見える状態です。肺線維症（間質性肺炎）、サルコイドーシスなどが考えられます。
	粒状影	広い範囲に見られる直径数mm以下の顆粒状（粉末のような）の影です。粟粒結核、肺真菌症、びまん性汎細気管支炎などが考えられます。
	囊胞影（ブラ）	肺胞の壁の破壊や拡張によって、隣合う肺胞とひつつき大きな袋になったものです。これが破れると自然気胸が起こります。
	瘢痕像	治療後に残った小さな痕跡の影です。
	胸膜肥厚	肺を包む胸膜が厚くなった状態です。過去の胸膜炎、肺感染症などが考えられます。
	胸膜瘻着	胸を包む胸膜に炎症が起り周囲にくっついている状態です。過去の胸膜炎、肺感染症などが考えられます。
	気管支拡張像	気管支が広がっている状態です。気管支拡張症などが考えられます。
	気管支壁の肥厚像	気管支の壁が厚くなっている状態です。慢性気管支炎や気管支拡張症などが考えられます。
	縦隔拡大	縦隔の幅が広く見える状態です。大動脈瘤、縦隔腫瘍などが考えられます。
	心陰影拡大	心臓の横幅が胸の横幅より50%大きくなっている状態です。心不全、心臓弁膜症、肥満の影響などが考えられます。
	横隔膜の挙上	横隔膜が上がっている状態です。横隔膜神経の麻痺、横隔膜弛緩症、肝腫大、横隔膜ヘルニアなどが考えられます。
	脊椎側弯	背骨が、左右どちらかに曲がっている状態です。
	大動脈の蛇行	大動脈がまっすぐに走行していない状態をいいます。動脈硬化などが考えられます。

心電図検査	RSR' パターン	右脚の電気の流れがわずかに障害されている場合に認めます。
	不完全右脚ブロック	右脚の電気の流れがわずかに障害されていますが、伝導時間は正常範囲内に保たれており問題のない状態です。
	完全右脚ブロック	右脚の電気の流れがブロックされた状態です。定期的に心電図検査を受けるようしてください。
	R波增高不良	心電図波形のR波（上向きの幅の狭い波）は、胸の左側の電極で記録した方が、胸の真ん中付近の電極で記録したものよりも大きくなるのが普通です。これが、ほとんど大きさが変わらない場合をR波增高不良と呼びます。
	異常Q波	心電図波形のQ・R・S波は、上向きのR波と下向きのQ波、S波で成り立っています。そのうちQ波が著しく大きくなる場合を異常Q波といいます。
	左室高電位	左胸の電極で記録した心電図波形の上向きのR波が通常より高い場合や、中央で記録した心電図波形の下向きのS波が深い場合です。左室肥大などで現れます、ST低下を伴わない場合は問題ないことがほとんどです。
	I 度房室ブロック	房室ブロックは心房から心室への電気の流れ（刺激伝導）に障害がある状態です。
	心室性期外収縮	本来、心臓の収縮が指令されない心室から、通常のリズムよりも早く発生した収縮をいいます。
	WPW症候群	心房-心室間の電気が伝わる正常なルート以外に副伝導ルート（ケント束）が存在するため心房心室伝導時間が短縮します。異常な伝導による頻拍発作がなく自覚症状もなければ問題ありませんが、精密検査をお勧めします。
	低電位差	心電図のQRS波の高さ（振れ幅）が小さくなる所見です。
	洞徐脈	心電図波形は正常ですが、心拍数が少ないものをいいます。
	洞性不整脈	心臓の拍動の波形は正常ですが、リズムが不整となる状態をいいます。
	心房細動	心房内で洞結節とは異なる無秩序な電気信号が発生し、その興奮が不規則に心室に伝わる状態です。精密検査・治療をお勧めします。
	陰性T	心電図波形のT波は収縮した心臓が元に戻るときにできる波で、通常は山型をしているT波が谷のようにへこんだ状態です。
	ST上昇	ST部分が通常より上がった状態です。
	ST-T低下	ST部が通常より下がった状態です。
	早期再分極	心筋が興奮からさめるのが時間的に早い状態です。
	左軸・右軸偏位	正面からみて右に心臓が傾いて位置している状態を右軸偏位、左に心臓が傾いて位置している状態を左軸偏位といいます。
	PQ短縮	心房から心室にいたる興奮伝達時間が短い状態です。

胃 カ メ ラ 検 査	逆流性食道炎	胃の内容物の食道への逆流が過剰に起こることで（胸やけやのどの違和感の症状）食道粘膜に炎症が生じた状態です。治療が必要です。
	萎縮性胃炎	主にピロリ菌の感染によって引き起こされる胃炎を指します。長年にわたって胃の粘膜に炎症が起こること（慢性胃炎）で、胃液や胃酸などを分泌する組織が萎縮した状態です。ピロリ菌検査をおすすめします。胃癌のリスクがあるので、ピロリ菌除菌の成功・不成功に関わらず年に1回の検査を受けましょう。
	粘膜下腫瘍	腫瘍が食道・胃・十二指腸の粘膜の下に存在していて、正常粘膜に覆われているので、正常粘膜が盛り上がっているように見える病変です。大きさや形によって悪性のものが疑われ精査・治療が必要なものがあります。
	バレット食道・上皮	通常、食道の粘膜は扁平上皮、胃や腸は円柱上皮という粘膜に覆われています。逆流性食道炎などで炎症を起こして傷害された上皮が胃から連続して胃と同じ上皮に置き換えられたものをバレット上皮、バレット上皮が存在する食道をバレット食道といいます。
	食道裂孔ヘルニア	横隔膜の下、腹腔内にある胃の入り口の一部が横隔膜の上に滑り出した状態です。ヘルニアが起こると横隔膜の締め付けが弱くなり胃の内容物が逆流して逆流性食道炎を起こしやすくなります。
	胃底腺ポリープ	胃底腺の過形成により、粘膜の一部が隆起したもので多発することがあります。ピロリ菌のいない胃に発生することが多く癌化することはほとんどないとされています。
	食道乳頭腫	食道の粘膜は扁平上皮という粘膜に被われていますが、この扁平上皮が増殖・隆起してきたポリープが乳頭腫です。良性のため放置しても問題ありません。
	カンジダ性食道炎	食道感染症の中で最も多いものでカビの一種であるカンジダが食道粘膜に侵入した状態です。免疫力の低下、過剰な糖の摂取などが原因になります。
	食道・十二指腸異所性胃粘膜	胃や十二指腸の粘膜の一部に胃粘膜が見られることがあります。多くの場合胃粘膜の働きはしていませんので治療や経過観察は不要と考えられています。
	平坦型・隆起性びらん性胃炎	胃の粘膜がただれて赤くなったり、びらん（粘膜の表面の欠損）を生じた状態です。癌との鑑別が必要なこともありますので経過観察または精密検査が必要です。
	胃過形成性ポリープ	胃の上皮が過形成により隆起したものです。大きくなると表面から出血したり、一部癌化があるので経過観察が必要です。
	表層性胃炎	胃の表面の防御機能の低下により胃の粘膜の表面が赤くなっている状態です。無症状のことが多いですが胃痛や胃もたれなどの症状がある場合は制酸剤などで治療を行います。
	胃・十二指腸潰瘍	胃酸の影響をうけて胃または十二指腸の粘膜に深く欠損が生じた状態です。ピロリ菌感染と非ステロイド系抗炎症薬が二大病因であるといわれています。ストレスも原因となります。出血や穿孔（胃や十二指腸に穴があく）の原因となりますので治療が必要です。ピロリ菌による潰瘍では除菌治療により再発抑制が知られています。
	胃・十二指腸潰瘍瘢痕	胃潰瘍が治癒し粘膜欠損が修復された状態です。経過観察が必要な場合があります。
	十二指腸炎、びらん	十二指腸に炎症が起こった状態です。炎症が軽度の場合は放置しても差し支えありませんが炎症がひどい場合は経過観察や内服治療が必要です。
	Brunner腺腫・過形成	十二指腸のBrunner腺腫が増殖し隆起したものです。多くのものは過形成なので心配りませんが、まれに腫瘍性のものがありますので精密検査が必要なことがあります。

胃レントゲン検査

胃 レ ン ト ゲ ン 検 査	食道憩室	食道または胃・十二指腸の壁の一部が外側に突出した状態です。
	食道裂孔ヘルニア	横隔膜にある食道が通る穴から、胃の一部が飛び出している状態です。胃の内容物が食道へ逆流し、逆流性食道炎を起しやすい状態です。
	胃びらん（表層性胃炎を除く）	胃の表面が浅く欠損した状態です。悪性のものと鑑別が必要なことがあります。
	胃底腺ポリープ	胃ポリープは胃の粘膜上皮が局所的に小さく盛り上がっている状態です。胃底腺ポリープは主にピロリ菌陰性の胃にみられる良性ポリープで、がん化することはないと言われています。
	胃ポリープ（底腺ポリープ以外のポリープ）	胃のポリープには、胃底腺ポリープ以外に過形成、腺腫などが考えられます。
	胃潰瘍	胃の粘膜が障害されて欠損を生じた病変です。急性期では出血する場合があります。
	胃潰瘍瘢痕	胃潰瘍が治癒したあとです。
	胃陥凹性病変（胃潰瘍を除く）	胃粘膜が陥凹した（欠損）状態です。悪性腫瘍が疑われ、精密検査が必要なことが多いです。
	急性胃（粘膜）病変	胃の粘膜の広い範囲がただれた状態です。びらん、潰瘍などが考えられます。
	慢性胃炎（萎縮性、過形成、肥厚性など）	胃の粘膜に炎症が長期間続く状態を言います。萎縮性胃炎や、過形成性胃炎、肥厚性胃炎などが考えられます。
	粘膜下腫瘍	胃の粘膜下の腫瘍性病変によりこぶ状に隆起または陥凹した病変です。良性のものが多いが悪性のものもあります。
	胃癌	胃の粘膜にできた悪性腫瘍（癌）です。
	胃隆起性病変（ポリープを除く）	胃の粘膜がもりあがった状態です。悪性腫瘍が疑われ、精密検査が必要なことが多いです。
	十二指腸潰瘍	十二指腸粘膜が傷害され、粘膜や組織の一部が欠損した状態です。ピロリ菌、非ステロイド性抗炎症薬、胃酸などが原因として考えられます。
	十二指腸潰瘍瘢痕	十二指腸潰瘍が治り粘膜が修復した状態です。
	透亮像	粘膜が内側に突き出した病変です。気泡、良性ポリープ、胃癌（特に早期癌）などが考えられます。
	圧排像	胃の周囲の臓器や腹腔内の腫瘍などにより胃が外側からおされて内腔側にくぼんだ状態です。
	粘膜不整	胃の粘膜構造が乱れた状態を言います。慢性胃炎や胃癌などが疑われます。
	辺縁の不整	胃の辺縁がギザギザや、多重線など線が複雑に入り混じる状態をいいます。早期癌、良性の潰瘍瘢痕などが考えられます。
	ひだの乱れ	ひだが通常の形や走行ではない状態です。慢性胃炎や腫瘍性病変などが考えられます。
	ひだ集中	胃の粘膜が引きつれて、ひだが一点あるいは線に向かって集まった状態です。良性潰瘍、悪性腫瘍などが考えられます。
	ひだ集中様	ひだが集まっているようにみえるものの、ひだ集中とは確定できない状態です。良性潰瘍、悪性腫瘍などが考えられます。
	ひだ粗大	ひだが太くなった状態です。慢性胃炎、胃癌、リンパ腫などが考えられます。

眼底 検査	緑内障	視覚障害の大きな原因となる病気の一つです。
	視神経乳頭陥凹拡大	網膜の神経線維が減少すると視神経乳頭の凹が通常よりも大きくなります。緑内障を疑う重要な所見です。眼圧が正常範囲内でも緑内障を疑います。
	白内障	眼の中の透明なレンズである水晶体が混濁する病気で、かすみや見にくさが起ります。視力も低下します。
	眼底出血	網膜の血管から出血が起こるもので、原因として多いのは、糖尿病や高血圧などです。
	黄斑上膜	黄斑の上に膜ができる網膜を障害する病気です。進行すると視力低下や、中心暗点、物がゆがんで見えるなどの症状が現れ、ゆっくり進行します。一般的には加齢に伴って起ります。
	(加齢)黄斑変性	物を見る機能の要となる黄斑部が障害され、見ようとするところが見えにくく、障害が中心窓に及ぶと著しい視力低下が起ります。
	ドルーゼン	(加齢)黄斑変性の前段階の病変のことです。
	糖尿病性眼底	糖尿病の慢性合併症の一つです。
	高血圧性眼底	高血圧の影響で網膜の出血などが生じます。放置すると動脈が弾力を失い血管壁が変化する網膜動脈硬化症に進行します。
	網脈細動脈硬化症	全身の動脈硬化に伴って網膜の動脈に現れたものです。高血圧が長年続くと起こるといわれています。
	近視性眼底	眼軸が前後に伸びることにより焦点が合わなくなり、ものがぼやけて見える状態のことです。

Scheieの分類 高血圧によって起こる眼底の変化を高血圧性変化(H)と細動脈硬化性変化(S)に分けて1~4に分類したものです。

H：高血圧変化	0：異常所見なし
	1：網膜動脈が正常より細くなります。
	2：1より著明に動脈が細くなり、1本の動脈に太い部分と細い部分ができる口径不同と呼ばれる現象が起ります。
	3：2の所見がさらに著しくなり、網膜出血や白斑が見られます。
	4：3の所見に乳頭浮腫（腫れ）が加わったものです。
S：動脈硬化性変化	0：異常所見なし
	1：軽度の動脈の血柱反射（＊1）と軽い動静脈交叉現象（＊2）が認められます。網脈動脈が正常より細くなります。
	2：1の所見が著明となります。
	3：血柱反射が血管の幅と同じ太さまで亢進し、血柱の色も濁るため血管があたかも銅線の様に見える銅線動脈となります。交叉現象がさらに著明となります。
	4：血管壁が濁って不透明になり血柱が隠れ、血管が白く見える、銀線動脈となります。

#### \*1 血柱反射

眼底検査で血管を観察したときに、血液に光が反射して輝いて見える現象のことです。動脈硬化で血管壁が薄くなると、通常より反射が大きくなります。

#### \*2 動静脉交叉現象

網膜は大変薄い組織であるため、網膜内の動脈と静脈が交叉しているところでは、血管の一番外側の層を共有しています。このため交叉している部分の動脈硬化は、静脈にも影響を与えます。動脈の血管が静脈の血管を隠してしまい、静脈が細く見えたり、動脈が静脈の血管を押しつぶし、静脈がうつ血することもあります。

腹部超音波検査	肝臓	肝嚢胞	肝臓に袋状の組織ができ、その中に液体がたまつた袋状の病変です。単発あるいは多発し通常は無症状ですが、嚢胞が大きくなると腹部膨満感、圧迫等の自覚症状が認められます。
		脂肪肝	肝臓に脂肪がたまつた状態です。飲酒や肥満などが原因です。生活習慣病（脂質異常症、糖尿病、高血圧）との合併が多い疾患です。食生活で栄養過剰を避け、節酒すること、有酸素運動を行うことが必要です。脂肪肝の約2割程度に、慢性肝疾患が進行し、脂肪肝炎・肝硬変・肝がんに移行するものがあり、注意が必要です。
		慢性肝障害	種々の原因で、慢性的に肝臓に炎症を生じる疾患です。慢性肝炎から肝硬変や肝がんといった、さらに重い疾患に進行していく場合があるため、原因の検査・早期治療が非常に大切です。
		NASH 非アルコール性脂肪肝炎	アルコールを飲まないにもかかわらず、大量飲酒者と同じように、肝臓に脂肪沈着、炎症、纖維化といった変化を生じる病気です。肝硬変、肝がんへ移行することがあるため、精密検査・加療が必要です。
		肝血管腫	肝臓の中にできる腫瘍で、海綿状をした血のたまつた腫瘍をさします。健診の超音波検査で偶然発見されることが多く、よほど大きくなれば問題はありません。初めて発見されたときや経過観察中に大きさに変化が見られる場合は、念のため精密検査が必要です。
	胆嚢	胆嚢ポリープ	胆嚢の粘膜がコレステロールの塊などで隆起した状態です。定期的に大きさを確認してください。 10mm以上の場合、悪性の腫瘍との鑑別が必要なために精密検査が必要です。
		胆嚢結石	胆嚢内に形成された結石のこととて、胆嚢炎や胆管炎の原因となります。胆嚢壁の肥厚を伴う場合や結石の後方の胆嚢壁が十分に観察できない場合は悪性腫瘍との鑑別のため精密検査が必要です。
		胆嚢腺筋腫症	胆嚢の壁が全周性に、または限局して厚くなっている状態です。
		胆嚢壁肥厚	胆嚢の壁が一部厚くなっています。原因を確認するために精密検査が必要な場合があります。
	腎臓	腎内石灰化	腎臓内にカルシウム・尿酸などが沈着している状態で、集合すると結石となる可能性があります。腰痛・側腹部痛・血尿などの症状を認める場合は受診が必要です。
		腎結石	腎臓内に石があります。腰痛・側腹部痛・血尿などの症状がありましたら、早急に受診が必要です。
		のう胞腎	両方の腎臓に多数の袋状の組織ができ、その中に水のようなものがたまつた状態をいい、先天性（遺伝子異常）と後天性に分類されます。腎機能低下を伴うことが多く、専門機関を受診することが必要です。
		腎血管筋脂肪腫	腎臓の中にできる良性の腫瘍で、血管や平滑筋や脂肪成分からできています。経過を見る必要がありますが、初回診断時には精密検査を指示する場合があります。
		(多発性)腎嚢胞	臟器内(肝臓、腎臓)に袋状の組織ができ、その中に水のようなものがたまつた状態をいい、良性の疾患です。2個以上のものを多発性とします。定期的に検査を受け、大きさの確認をすることが必要です。
	脾臓	脾嚢胞	液体の入った袋状の病変です。脾液が溜まっている場合や、液体を產生する腫瘍ができている場合などがあります。5mm以上嚢胞や複雑な形の嚢胞は経過観察や精密検査の必要があります。
		脾管拡張	脾臓の中を通っている細い管の主脾が通常時よりも拡張している状態です。
		脾描出不能	検査当日の状態（腹腔ガスや肥満・食事の影響等）により脾臓が観察できない状態をさします。精密検査をおすすめします。
	脾臓	脾腫	超音波で脾臓の最大径が10cm以上の場合を脾腫としています。肝機能異常や血液疾患などが疑われることがありますので、他の検査を含めて継続的な検査が必要となる場合があります。
		脾嚢胞	脾臓に袋状の組織ができ、その中に液体がたまつた袋状の病変です。小さなものは問題はありませんが、大きくなりすぎると周囲組織を圧迫して障害を起こすことがあります。
		副脾	脾臓の近くに約10%の割合で認められ、通常、病的な意義はありませんが、定期的に検査を受け、大きさの確認をしてください。

婦人科検査	超音波	子宮筋腫	子宮の筋肉に発生する腫瘍です。良性の腫瘍ですが、手術が必要な場合もあります。
		子宮頸管ポリープ	子宮頸部の入り口にある子宮頸管の粘膜にできた良性のポリープです。大きくなると不正出血する場合があります。
		子宮腔部びらん	子宮頸部の一番近い部分を子宮腔部といい、この子宮腔部に「びらん」ができたものです。ほとんどの場合、治療は必要ありません。
		卵巣腫瘍	卵巣にできた腫瘍ですが、悪性のものと良性のものがあります。良性の場合でも手術が必要な場合もあります。
	細胞診	NILM (陰性)	正常または正常範囲内の所見です。正常範囲内では細胞に変化がみられるものも含みますが、炎症・萎縮・刺激などによる良性変化であり心配がない所見です。
		ASC-US (軽度の異型扁平上皮細胞)	子宮頸部の表面を形作っている細胞（扁平上皮細胞）に変化がみられますが、良性悪性の区別がつきません。受診が必要です。
		ASC-H (高度の異型扁平上皮細胞)	子宮頸部の表面を形作っている細胞（扁平上皮細胞）に変化がみられ、悪性変化の可能性が疑われます。受診が必要です。
		LSIL (軽度の扁平上皮病変)	子宮頸部の表面を形作っている細胞（扁平上皮細胞）に軽度の異常（異形成）がみられます。受診が必要です。
		HSIL (高度の扁平上皮病変)	子宮頸部の表面を形作っている細胞（扁平上皮細胞）に高度の異常（異形成）がみられます。早急に受診が必要です。
		SCC (扁平上皮がん疑い)	扁平上皮がんが疑われます。早急に受診が必要です。

マンモグラフィ	石灰化粗大	乳房内部にカルシウムが沈着した状態をいいます。
	石灰化（良性）	カルシウムが沈着した状態をいいます。乳腺症、線維腺腫など良性疾患が考えられます。
	石灰化（悪性疑い）	カルシウムが沈着した状態をいいます。一部の石灰化は乳がんによるものが疑われます。
	局所的非対称性陰影	部分的に片方の乳房に部分的にみられる影で、しこりや乳腺とは言い切れず、病変が隠れている場合も考えられます。
	非対称性乳房組織	片方の乳房組織の体積が大きいもの、乳房が高濃度であるもの、乳管が目立つ状態をいいます。病変が隠れている場合も考えられます。
	構築の乱れ	腫瘍ではないが正常な乳腺が歪んで見える状態をいいます。手術を受けたことがない場合、がんの存在を疑います。
	腫瘍陰影	乳腺とは異なる組織の塊がみられる状態です。良性、悪性腫瘍などが考えられます。
	スピキュラを伴う腫瘍	腫瘍の辺縁に見られる棘状の影をいいます。硬癌、浸潤性小葉癌などが考えられます。
	のう胞	袋状の中に液が溜まった状態をいいます。良性の腫瘍が考えられます。
	腋窩リンパ節	脂肪で置換されていない腫大した腋窩リンパ節です。
	梁柱の肥厚	乳腺の線維性隔壁の肥厚している状態です。乳腺の浮腫が考えられます。
乳腺超音波検査	乳腺症	乳腺に生じる変化であると考えられています。ホルモンバランスの変化に関連して生じるものであり、痛みが出たり、乳房内にしこりができたりする場合もあります。
	線維腺腫	乳腺にできる良性腫瘍です。
	のう胞	乳腺内に袋状の組織ができ、その中に液体がたまつた良性の腫瘍です。30～50歳代の方に多く、閉経し60歳を過ぎるとほとんど見られなくなります。
	線維腺腫	20歳代の女性に多い良性乳腺腫瘍です。小さいものであれば治療の必要はなく、経過を観察します。しこりは乳がんと比べて柔らかく、乳腺の中でコロコロと動くのが特徴です。大きくなつた場合は摘出手術をすることもあります。
	乳腺症	30～40歳代によく見られるもので、病気というよりも乳腺に生じる変化の総称であると考えられています。 乳腺症は、ホルモンバランスの変化に関連して生じるものであり、痛みが出たり、乳房内にしこりができたりすることもあります。乳がんのリスクが高まることはありません。
	乳管拡張	乳管が拡張している状態です。乳腺の分泌過剰や、炎症によるもの、腫瘍などが原因で拡張します。多くは無症状ですが、乳頭から茶褐色や血液が混じった分泌物を生じる場合は、早急に受診が必要です。
	乳管内乳頭腫	乳汁の通り道である乳管内に発生する良性腫瘍のひとつで30～50歳代に多いといわれています。 しかし、血性分泌物がみられたり、しこりとして認識されたりすることもあり、乳がんと類似する症状がみられることがあります。
乳腺腫瘍	囊胞内乳頭腫	管状の乳管が袋状（囊胞状）に拡張したものをいいます。30～50歳代に多いといわれています。
	乳腺腫瘍・乳腺腫瘍	乳房内で他の細胞とは異なる組織の塊が見られます。良性・悪性いずれの場合もありますので詳しい検査が必要です。

胸部 CT 検査	甲状腺腫瘍	首の前面に位置する甲状腺に生じた腫瘍をいいます。良性腫瘍のこともあります、悪性腫瘍が生じる場合もあります。
	気管支拡張症	気道の壁が損傷し、気管支が広がったまま元に戻らない状態（拡張症）です。
	気管支炎	気管と気管から枝分かれする気道（気管支）が感染症などによって炎症を起こすことです。
	胸水	肺の外側（胸腔内）に通常存在しない水がたまつた状態です。心不全、腎不全、胸膜炎などが考えられます。
	肺炎	肺に炎症が生じた状態をいいます。
	間質性肺炎	肺の間質という部分におこる肺の炎症です。
	肺腫瘍	肺の組織に発生した腫瘍をいいます。
	非結核性抗酸菌症	結核菌以外の抗酸菌が肺に感染して起こる病気です。非結核性抗酸菌は土や水などの環境中にいる菌で、結核菌とは異なり、人から人には感染しません。
	肺気腫	肺に空気がたまってしまい、うまく息が吐けなくなる病気です。喫煙が原因のことが多いですが、受動喫煙による影響も否定できません。慢性閉塞性肺疾患（COPD）などが考えられます。
	胸膜肥厚	肺を包む胸膜が厚くなった状態です。過去の胸膜炎、肺感染症などが考えられます。
	胸膜瘻着	肺の表面を覆っている胸膜に炎症が起り周囲に瘻着した跡です。過去の胸膜炎、肺感染症などが考えられます。
	胸膜炎	肺の表面を覆っている胸膜が炎症を起こしている状態です。
	胸部大動脈瘤	胸部大動脈壁の一部が弱くなり膨らんだものです。瘤は大きくなり続けることがあります、治療しないまま放置すると破裂や破裂が起こる可能性があります。
	横隔膜ヘルニア	横隔膜に、生まれつき（先天性）あるいはなんらかの原因（後天性）によって穴ができる、その穴を通って臓器が抜けた状態をいいます。
	炎症性瘢痕	過去に何らかの炎症を起こしたが、今はその形跡だけが残っている状態。
	大動脈瘤	大動脈にこぶ状のふくらみができる状態。先天性組織異常や動脈硬化などが考えられる。
	心不全	心臓から血液を送り出す力が不足して引きおこる病態です。原因としては高血圧性心疾患、心臓弁膜症、心筋梗塞などでの急性循環不全などが考えられます。
	縦隔腫瘍	心臓、食道、気管などの臓器がおさまる空間である縦隔内に発生した腫瘍のことを言います。
	浸潤影	肺胞内への細胞成分や液体成分が入り込んで生じる境界の不明確な陰影をいいます。肺炎、肺結核など肺感染症に見られます。
	腫瘍影	直径3 cmを超える類円形の陰影をいいます。肺膿瘍、肺腫瘍などに見られます。
	結節影	直径3 cm以下の円形の影をいいます。原発性肺癌や、他の臓器からの転移、結核、肺真菌症、非結核性抗酸菌症、過去の肺炎、良性腫瘍（過誤腫など）などが考えられます。
	無気肺	肺の中の空気が著しく減少したり、肺の中に空気が入っていない領域ができることです。

腹部 CT 検査	憩室	大腸の壁の弱いところにできる小さなポケット様の袋のことをいいます。
	憩室炎	憩室に炎症や感染症が起きた状態です。
	肝囊胞	肝臓内的一部に袋状に液体が溜まったものです。
	肝炎	何らかの原因により肝臓に炎症が生じた状態を指します。ウイルス感染、アルコール大量摂取、薬剤、肥満などが原因で起こります。
	脂肪肝	脂肪肝は、中性脂肪が肝臓に多く蓄積した状態です。いろいろな原因で起こりますが、過食、運動不足、飲酒などが考えられます。
	肝血管腫	小さな血管が集まってできている肝臓の良性腫瘍です。
	肝硬変	慢性肝疾患が進行し肝臓が硬く変化し、肝機能が低下した状態です。
	肝がん	肝臓に発生するがんです。
	肝内石灰化	肝臓に炎症が起きたり、出血があったり、細菌が感染して治癒したあとなどに出現すると言われています。
	肝内胆管結石	肝臓内の胆管にできた結石のことです。
	総胆管結石	総胆管にできた結石のことです。
	胆囊ポリープ	胆囊の内部に突き出た病変（ポリープ）です。
	胆囊腺筋腫症	胆囊の壁が通常よりも厚くなる状態です。
	脾腫大	脾臓が膨れて厚みが厚くなっていることです。
	IPMN	脾管内乳頭粘液性腫瘍。脾臓にできる嚢胞（内部に液体を溜めた袋状のもの）の一種です。盛り上がるよう増殖する腫瘍で、豊富な粘液を分泌することが特徴です。はじめは良性であっても進行し癌になる可能性があるため定期的な経過観察が必要です。
	腎結石	腎臓内にできた結石のことです。
	腎囊胞	腎臓の中に袋状に液体がたまつたものです。
	水腎症	腎臓で作られた尿の流れがせきとめられて、尿の通り道や腎臓の中に尿がたまつて拡張した状態をいいます。

頭部 MRI ・ MRA 検査	副鼻腔炎	鼻腔周囲にある空洞に、風邪などが原因で炎症が起こることにより、膿がたまる病気です。
	粘膜肥厚	粘膜が肥大して空気の通り道をふさぎ、鼻詰まり状態を引き起こす状態です。
	中耳炎	鼓膜より内側の中耳という空間で起こる感染症です。（細菌やウイルスが喉から中耳へ移動することが原因です。）
	クモ膜嚢胞	脳とくも膜との隙間にできた袋状の液体のたまつものです。
	脳溝の開大	脳の表面のしわが広がっている状態です。誰にでもしわができていますが、年齢をとることでしわが広がります。特にアルツハイマー病では極端に広くなります。
	脳室の拡大	脳脊髄液が脳室にたまる病気です。脳室が拡大し脳が圧迫され萎縮がおこります。進行すると水頭症などの症状がでます。
	脳虚血性変化	脳の一部が変化することがあります。加齢によるものが多く、変化が強いと脳の働きに影響したり、脳梗塞の危険因子となったりします。
	虚血性白質病変	血の巡りが悪くなり、脳の毛細血管に血液が流れず脳に変化した部分がある状態です。
	脳萎縮	脳の容積が減少している状態をいいます。加齢、飲酒、喫煙、脳血管障害などさまざまな要因が考えられます。
	海馬の萎縮	海馬は脳の記憶を司る部位です。海馬の萎縮（縮み）は認知症と関連があるとされています。生活習慣を変えたり、運動トレーニングを行うことで、認知症の発症を予防することができるとも言われています。
	脳挫傷	頭部を強く打つなど外傷を受けた際に、頭蓋骨内で脳が衝撃を受けて脳本体に損傷がおきた状態です。
	脳出血	何らかの原因により脳の血管が破裂てしまい、脳の中に出血した状態です。
	脳腫瘍	悪性・良性を問わず頭蓋内にできる腫瘍のことをいいます。
	神経鞘腫	神経を取り囲んでいる細胞から発生する腫瘍です。
	海綿状血管腫	静脈奇形です。1cm以下の小さいものがほとんどです。
	脳梗塞	脳の血管が突然詰まって、血流が途絶え、脳の神経細胞が死んでしまう病気です。
	ラクナ梗塞	脳の深い部分を流れている細い血管が詰まってしまうことで起きる脳梗塞です。
	髄膜腫	脳を覆うくも膜の細胞から発生する腫瘍です。脳腫瘍では最も多い良性腫瘍です。
	下垂体腺腫	下垂体という部分に腫瘍が生じる病気です。下垂体は脳の中ではサイズの小さい臓器ですが、さまざまなホルモンを分泌する機能を持っています。
	動脈瘤	脳動脈の血管壁が薄くなったりもろくなることで、そこが膨らんで血液が入り込みこぶのような形状になります。喫煙、大量飲酒、高血圧、家族歴など原因が考えられます。出血のリスクがあるので精密検査をおすすめします。
	動脈硬化症	動脈の壁が厚く硬くなった状態です。
	脳動静脈奇形	毛細血管が作られずに動脈と静脈が直接つながってしまった生まれつき（先天性）の病気です。